

奈良から紡ぐ薬の物語



と呼ばれる目録があり、そこには「病に苦しむ民衆に分け与える」と記されている。現在も使われている薬にも、役行者のキハダを使った胃腸薬を伝えた（日本最古の和漢薬として「陀羅尼助」や「三光丸」の元になったと言われる）や、中将姫が世話をしてくれた村人に薬の作り方を教えた（婦人薬「中将湯」の由来）など、このころの仏教関係者が薬の処方の方になったという伝承も多い。

このように奈良は薬の文化の発祥地といえる場所だったこと、良質な薬草を産する中南和地域があること、民衆への薬処方の役割を果たす寺院が多かったことなどから、その後も薬に関係する業者が多くなっていった。明治時代に製薬会社を興した人物に、ロート製薬の山田安民や、ツ

薬の歴史と文化が息づく健康と癒しの地「奈良」

「健康は生きる目的ではなく、日々の生活の資源である」と、1986年のヘルスプロモーションに関するオタワ憲章に記されている。身体がだるいとき、怪我や病でどこかに痛みを抱えているときに、思うように身体が動かせないと感じるのは、多くの人が共感するところだろう。健康であることは、私たちが生き生きと日々を楽しむための基盤だ。

病気を予防し、時には回復を助けるために必要不可欠なもののひとつが「薬」である。では、薬はいつから人類に用いられるようになったのだろうか？

薬の文化が取り入れられる以前、病に苦しむ人々にできる主なことは神仏への祈りだった。『古事記』『日本書紀』にもその様子が描かれている。崇神天皇5年（西暦紀元前93年）には、国の人口が半減するほどの疫病が蔓延し、大直禰子神社や墨坂神社、大坂の神（大坂山口神社）などを創建し、疫病の平癒を祈ったことが記されている。

薬の文化が本格的に日本に伝わっ

シャクヤクも鎮痛や筋肉を緩める効果があるとして根の部分が薬として使われている。また、美人を形容する言葉として「立てばシャクヤク、座ればボタン、歩く姿はユリの花」というように、非常に美しい花を咲かせる。下市町平原のシャクヤクガーデンでは4月～5月頃の開花シーズンに来園者を魅了している。

また、大和橘は日本固有の柑橘だ。柑橘類の皮を乾かしたものは「陳皮」や「橘皮」などといって、胃腸の働きを整える作用がある。大和橘は絶

たのは、5世紀頃、朝鮮半島から伝来したと考えられている。允恭天皇の時代の文献に「薬で病を治療した」という記述がある。

薬が国家の政策となったことが確認できるのは推古天皇の時代だ。推古天皇19年（611年）に、推古天皇が菟田野で薬猟を行った記録が残っている。「猟」の字が使われていることから、薬草を摘み、鹿角や鹿茸（角化していない、柔らかい状態の若い鹿の角）を採取するようなものだったと考えられている。

大宝元年（701年）、奈良時代に入ると、中国の律令に基づいた大宝律令が公布され、日本でも唐と同様に「医疾令」という医薬全般にわたる諸規定が定められた。医師の教育制度を確立し、薬園で薬草を栽培するなど、医療と薬を常時維持・供給できる体制作りが始まっていた。

民衆への薬文化の広がりには、仏教の存在も大きい。仏教には学ぶべき学問として「医方明（医療・薬学）」があり、知識のある僧たちは民衆救済のために薬を施した。これが医学や薬学に関する知識を民衆に伝える役割も果たしていたと考えられている。光明皇后が聖武天皇の遺品を納めた正倉院には薬とともに「種々薬帳」

減寸前になっていたが、廣瀬大社の境内で代々受け継がれてきたものを「なら橘プロジェクト」の活動により増やした。こちらもジャムやスイーツへの香りづけ、大和橘胡椒などさまざまな商品になっている。

薬草の栽培から現代的なハーブ製品、健康食品まで、奈良の薬草はその効能と美しさで私たちの生活を彩っている。ぜひ注目してほしい。



ムラの津村重舎など、奈良県出身者が多いことも、薬草の地・薬の地としての奈良を裏付けるものだ。

奈良の薬草文化は現代でもその息を絶やすことなく、現在も奈良県中南和地域で薬草の栽培が行われている。また、医薬品として使われない部分にも、薬膳に適した作用があるもの、ハーブとして香りのよいものがあり、それらを使った食品などが奈良県産の新たな商品となっている。

例えば、奈良県産の「大和当帰」は高品質ブランドとして知られている。薬として使用されるのは根の部分だが、葉は食品として使われ、セロリに似た芳香を生かして料理に用いられている。また身体を温める効果があるため、入浴剤などにも使われている。

佐藤薬品工業 和漢薬研究所

前ページで紹介したように、奈良県は和漢薬の発祥地として、薬に関する豊かな歴史と文化を持つ場所だ。奈良県はこれまで、奈良の伝統的な漢方文化の再興に取り組んできた。しかし、現在の生薬栽培は安価な中国産の流入や栽培者の高齢化によって大きな打撃を受け、国産生薬は市場全体の約1割に過ぎない。奈良県内でも昭和50年代には年間50トン近く栽培されていた大和当帰が、平成23年には1トン近くに減少するなど、栽培量が激減している。中国産生薬が値上がりしていることから、国産生薬の需要は今後さらに高まると見込まれる。

奈良県は、薬事研究センターや農業研究開発センターなどの機関を通じ、栽培技術の改善や成分分析、薬として用いられる



和漢薬研究所 所長 岡田圭二さん



芍薬の花

手間がかかり熟練作業も多い。さらに今年（令和6年）は猛暑で葉ダニが発生し多くの被害を受けた。花が咲くと根が成長せず生薬としての商品価値が失われるため、厳しい管理も求められている。

和漢薬研究所ではこうした課題を抱えながらも、自社栽培の薬用植物を活かした商品開発を進めている。こむらがえりに効果がある漢方薬の「ツラネルゼリー（芍薬甘草湯）」や、しょうがパウダーを使った栄養機能食品「サプリースープ」、無添加石鹸「さとやく石鹸」、化粧品「メデイメリー」など、自社で栽培

以外の部位の活用検討などで企業を支援している。これにより、企業が薬用植物の栽培から商品開発まで一貫した体制を構築できるようなサポートしている。

その中で、奈良県橿原市の佐藤薬品工業株式会社が平成27年に「和漢薬研究所」を立ち上げ、薬用植物の栽培事業を開始した。

和漢薬研究所は地域の耕作放棄地を借り受け、薬用植物の栽培による景観改善と地域活性化を目指している。現在、約1万7000平米の農地で大和当帰、大和芍薬、生姜などを栽培し、さらに地黄や川芎（センキュウ）、甘草などの試験栽培も行っている。同所は、四物湯（シモツトウ）などを構成する生薬を自社栽培で完結できることを目指し、栽培から商品化までの一貫した体制を目指している。

しかし、国産生薬の生産は課題が多い。収益性の低さが一因で、例えば大和当帰の場合、種をまいて収穫から加工までに約3年の歳月が必要だ。また乾燥や湯もみといった工程が多く、

した奈良の生薬を原料とした商品を展開している。これらは高品質な商品として評価されている。

和漢薬研究所は、SNSを通じて栽培風景やイベント情報を発信し、和漢薬の魅力を広める活動も行っている。また農業体験やワークショップを開催し、観光客や地元の人々に奈良の和漢薬文化を伝える場を提供している。和漢薬研究所の岡田所長は、「奈良は和漢薬発祥の地であり、その伝統が途絶えるのは惜しい。もっと多くの人に奈良の和漢薬文化を知ってほしい」と語る。今後は奈良の伝統生薬を安定して栽培できる技術の確立と、和漢研究所の知名度向上を目指している。

三光丸 クスリ資料館



資料館館長の浅見潤さんが令和6年に「奈良とくすり」上梓。奈良の薬の歴史が詳しく書かれている。



一般財団法人 三光丸クスリ資料館

奈良県御所市大字今住606

0745-67-0003

9:30~16:30 (入館は16:00まで)

休 土・日・祝日

三光丸の製造と販売の歴史を知り、薬が暮らしに根付いてきた背景を学び、漢方への理解を深められる資料館だ。

三光丸クスリ資料館は、七百年の歴史を持つ和漢の健胃薬、三光丸を通じて大和の薬草文化や配置薬の知識を学べる施設である。三光丸は元応年間から製造され、暮らしの中で愛され続けてきた薬であり、その背景を深く知ることができる。展示には薬箱や江戸時代の看板、製造道具など歴史的価値のある品々が並び、映像コーナーも設けられており、視覚的にも楽しみながら学べる。また薬草や薬づくりの道具に触れたり、薬づくりの体験も可能。五感を通じて薬の世界を深く味わうことができる。



大和当帰の葉



芍薬の根



佐藤薬品工場の周辺にある「ほ場」。大和当帰をはじめ、さまざまな植物を栽培している。奈良県研究機関と連携して栽培しているものも。

11/4 開催 奈良漢方マルシェ



奈良県主催の「奈良漢方マルシェ」が11月4日、奈良市の県庁主棟前回廊で開催され、多くの来場者で賑わいを見せた。今回のイベントは3月に続く2回目の開催で、県内外から集まった11店舗が出店。会場には、大和当帰をブレンドしたコーヒーやお茶、玄米麺、香塩、クラフトコーラ、キハダの木を使ったスプーンや化粧品など、漢方に関連した多彩な商品が並び、多くの注目を集めた。

来場者からは「珍しい薬草を気軽に楽しめるのが面白い」「健康に良さそうな商品がたくさんあってもっと知りたくなった」などの感想が寄せられ、試飲や試食を通じて漢方の魅力を堪能。奈良県の薬用植物への理解を深めるイベントとなった。



入浴ハーブ・石鹸など

体を温める効果がある大和当帰などを活用した入浴剤が人気。吉野町の事業者「チアフル」は奈良のさまざまな植物を活用した石鹸なども作っている。

奈良の 生薬・薬草商品

奈良県産の薬草商品はこの数年で数多く誕生し、奈良県内外で事業者の数が年々増加している。これらは、奈良の新たな産業として着実に根付きつつあり、健康や美容にも深く関連している。商品は食べるものから身体に使うものまで多岐にわたり、豊富なバリエーションを誇る。今回は、手に取りやすい薬草商品の中からいくつかを紹介する。



スキンケア用品

和漢植物の根を使ったスキンケア商品も。「佐藤薬品」のメディメリーは、はトウキ、カンゾウ、シャクヤクなどの根のエキスを使い、肌に潤いを与える商品を10月末に発表したばかり。



ハーブティーなどのお茶

薬草を使ったハーブティーやお茶は、香り豊かでリラックス効果が高く、健康維持や美容にも役立つ飲み物。「ポニーの里ファーム」は多くの薬草商品を製造、販売しているが、ハーブティーもその一つ。

動画配信

くすり発祥の地、奈良の魅力を伝えるために、奈良県公式総合チャンネルでは、奈良のくすりに関する動画配信もしている。

新たな奈良県の魅力を発見！ くすりの発祥の地「奈良」

奈良の有名な社寺は、くすりと深い繋がりがあります。奈良の新たな魅力を「くすり」という新たな切り口で感じてください。



<https://www.youtube.com/watch?v=GqvdsCYHtRI>

奈良ゆかりの薬用植物が生薬に生まれ変わる

最近、耳にする機会が増えてきた「生薬」「漢方薬」の多くは、植物が元になっています。その薬用植物は、どの様にして生薬に加工されるのかを感じてください。



<https://www.youtube.com/watch?v=5vmSanVbsr4>

イベント情報

12月15日(日) NaRaくすりと健康2024(仮)

奈良のくすりと歴史に関連する展示コーナーの設置や、生薬・漢方関係の体験、ワークショップなども開催！ぜひ足をお運びください。

① イオンモール大和郡山(2階イオンホール、2階イオン前広場)

② 10:00~17:00



- ・生薬加工処理体験:奈良ゆかりの生薬である「大和当帰」の湯もみ体験
- ・薬草入浴剤ワークショップ:数種の薬用植物を使用して、自分オリジナルの入浴剤を製作
- ・おくすり作り体験:昔ながらの奈良の伝統薬「三光丸」を模した製造等を実際に体験



調味料など

香りの良い薬草は調味料などでも活用されている。「Totalbeauty 春」の大和当帰の葉が入った発酵食品の塩こうじは、そのまま食べても料理に使っても旨みや甘みが際立つ。



そうめんなどの食べ物

手軽に取り入れられる食べ物としても生薬の活用はさまざまある。例えば大和当帰の葉を粉末状にして生地に練り込んだ素麺を「大和かぎろひ」が製造している。